

<内容紹介>

古代桑田郡主要部は現在の京都府亀岡市域にあたる。同郡の延喜式内社は十九座からなり、水戸学派で東京帝国大学教授だった栗田寛は現存の社<sup>やしろ</sup>と比定して上田正昭などもそれに従った。筆者は地形などを考慮して数社修正した。その分布図を作成すると亀岡盆地では低部への忌避傾向が読み取れ、「丹の海<sup>に うみ</sup>」開削後に成立した三社を除いて、ほぼ海拔100mよりも高い位置に立地していることが明らかになった。

亀岡(明治初めまでは亀山)で人気の高い伝承は「丹の海<sup>に うみ</sup>」の干拓であろう。

京都嵐山の松尾大社祭神大山咋神<sup>おほやまくひのかみ</sup>は秦氏の氏神であるが、種々の伝承から、大山咋命が亀岡盆地に先住していた出雲族の協力を得てその開削を実行したようである。本報告では、考古学的資料を地形学的観点で解釈し、大山咋命が見た丹の海を復元し、開削すなわち干拓の時期を求めた。

亀岡盆地底は三日月に準<sup>たざら</sup>えると、外弧は亀岡活動セグメントによって形成された牛松山や三郎ヶ岳が連なる山地の麓にあたり、この付近では逆断層活動が続いている。外弧内弧の交点を結んでできる弦<sup>つる</sup>に番<sup>つが</sup>えた矢の向かう方向は鬼門<sup>うしとら</sup>の良(北東)にあたる。丹の海はその亀岡盆地底の南東半部を占めていた。

この南東隅にあたる丹の海の排水口では、請田神社<sup>うけた</sup>と桑田神社<sup>くわた</sup>がいわば水門の左右の門柱をなしており、両社には大山咋命が祀られている。この排水口付近で開削工事が実施されたのであるが、その内容はPart 2で論じる。

遺跡分布の詳細を見ると弥生時代の遺跡は、海拔 98 m 付近に汀線を持つ丹の海よりも高い位置にある。さらには古墳時代の古墳群も丹の海にはない。

亀岡市旭町の現松尾神社前の里遺跡<sup>きと</sup>の住居跡とそれに付随した美濃田古墳<sup>みのだ</sup>群は三日月のほぼ矢摺<sup>やずり</sup>に相当し、この地は古墳時代中期末から後期の大山咋命一族の生活基盤の存在が想定される。開削工事の拠点は排出口そばの桑田神社付近ではあろうが、現松尾神社付近が大山咋命一族の生活拠点であったのではないか。丹の海干拓の時代としてこの古墳時代中期末から後期が想定されるのである。

本報告は明確な研究目的を設定して書き始めたものではない。試行錯誤しつつ小さな発見を積み重ねてきた結果である。その流れをこの報告では知っていただきたい。記述の流れは先を見通したものではなく、悩みも含めてそのまま、記述してきた。学会誌投稿の研究論文の体裁をとっていない。本報告の体裁こそ、著者が価値を置くものでもある。

著者は自らを地理学者と自負している。著者の学生時代は、地理学は人と自然の関係を捉えて誌す科学と説明された。自然系も人文系も理解そして駆使できるのが地理学者というようなメルヒェン的な認識があった。それを実現しているのがこの著作と考えたい。

地球科学的観点でみると二つの想定外の発見があった。

1. 丹の海の湖岸線は低位段丘のなかほどに位置：これは、低位段丘の下半が古墳時代には湖底であったことを示しており、亀岡盆地の低位段丘の時代が従来の研究で想定されてきたものよりかなり新しいことがわかった。

2. 復元した古墳時代の湖水面下に縄文期遺物またはその破片を含む遺跡が分布：大山咋命が見た丹の海は、より過去の時代よりも水位が低下した際の丹の海と考えている。排出口は時間の経過とともに、Part 2 で論じるように硬岩に属する玄武岩が谷頭侵食で徐々に低下してきたものである（発達地形学）。

それゆえ、大山咋命が見た古墳時代の湖面の下には、弥生時代またはそれ以前の遺跡は存在しない筈なのである。筆者はこの当然の帰着にかなり落ち込んだ。

牛松山～三郎ヶ岳の山麓の三日月の外弧上には、亀岡盆地で最も古い神社の現愛宕神社と現出雲大神宮などが分布し、これらの前面には弥生時代（含縄文期遺物またはその破片）の遺跡群が展開する。それが亀岡活動セグメントの逆断層活動によって、逆断層の下盤に属する遺跡群が見かけ上、現在では丹の海の湖底に配置されていることを発見したのである。

以上の二つの発見についての詳細な分析は別途報告する予定である。（以上）